

2015年(平成27年)4月17日 金曜日

# ジャンボ渡辺の学 富士山

私が中学2年生だった約50年前の夏休みに、友人とふたりで富士山頂まで10日間かけて徒歩で往復した経験を、2回に分けてお話しします。

当時の私の住まいは静岡県三島市。以前から学校近くを流れる狩野川の環境に興味を持っていました。上流から河口の沼津港まで歩き、河原の石や植生、魚の種類などを調べていました。

今度は、毎日眺めている富士山の伏流水の流れに沿って歩いてみたくなりました。伏流水は駿河湾に湧き出しているといわれています。そこで、狩野川河口の千本浜海岸

## 50年前の夏休み 海から頂上へ



渡辺豊博さん

# 残っていた富士講の風習

を出発し、富士山を往復して、駿河湾に突き出ている約1キロの小さな半島の「大瀬明神の神池」をゴールに定めました。神池には富士山の伏流水が湧き出しているとする説があります。

駿河湾に湧き出した富士山の水を、逆に山頂の水源地に返してみたいと考えました。そこで、駿河湾の海水を自宅にあった20リットルのポリタンクに注ぎ、友人と交代でしょいこで背負って歩き出しました。山麓を進み、須走口登山道から山頂を往復する約80キロを、10日かけて歩く計画です。

私は身長が180センチあり、持久走が得意で体力にも自信がありました。でも、無理やりに誘った友人は「こりゃ修行だ」とぼやいていました。

途中の裾野市や御殿場市辺りをとぼとぼ歩いていると、驚くべきことが起こりました。近所の人たちが「どうした。この辺りはかつて、「富士講」に代表される富士信仰が盛んな土地柄でした。子どもに白装束の衣装を着せ、一緒に頂上を目指す伝統がありました。私たちのことを「信仰心のある中学生だ」と思ったようです。



山梨県側の吉田口登山道。現在も昔ながらの道が残っている。左は筆者、右はグラウンドワーク三島提供

「富士山に登るの?」「どこに泊まるの?」「お金はあるの?」と次々に声をかけてきました。「海水をお山の頂上まで運ぶ奇特な中学生がいる」と、口コミで広がっていたようです。

この辺りはかつて、「富士講」に代表される富士信仰が盛んな土地柄でした。子どもに白装束の衣装を着せ、一緒に頂上を目指す伝統がありました。私たちのことを「信仰心のある中学生だ」と思ったようです。

「私の家に泊まれ」という人まで現れ、10泊のうち6泊を、そうした方々にお世話になりました。豚カツやすき焼きなどの豪華な夕食が出され、集まってきた親戚や近所の人たちが、私や友人のポケットなどにお金をねじ込んできました。1万円くれた人もいました。当時としては相当な金額です。しかも「頑張ってきな」と言うだけで、名前も教えてくれない人ばかりです。合計で約50人から10万円以上を預かりました。

夕食の席で、富士山に関する色々な話を聞きました。山頂で「金明水」と名付けられた井戸水を飲んだらがんが治ったという話から、山頂で霊を見たという話までありました。

見知らぬ登山者をもてなし、登れない自分の代わりに登拝という修行の御利益を登山者に託す「富士講」の風習が、約50年前はまだ残っていたのです。今回は、頂上を極めて帰ってきた私たちを、熱烈に歓迎してくれた様子を紹介します。

わたなべ・とよひろ  
都留文科大教授